

李賀「後園鑿井」考——六朝・唐代における井戸描寫を通じて

山崎 藍

はじめに

以前筆者は、「元稹悼亡詩「夢井」新釋——中國古代における井戸觀の側面」という小論において、中國における井戸觀の分析に基づき、中唐の詩人元稹が制作した悼亡詩「夢井」の獨自性を考察した。¹⁾「夢井」の特徴のひとつは、「今宵泉下人、化作瓶相警（今宵 泉下の人、化して瓶と作りて相警む）」とあるように、亡くなった妻が瓶（つるべ）となって夢の中に現れる點である。「夢井」については多くの先行研究があるが、筆者は詩歌と小説に描かれる井戸の違いに着目することや、瓶には魂の依り代としての機能があるという民俗學的視點を用いてこの詩の解釋を試みた。

本稿では、中唐の詩人李賀の作品「後園鑿井」について、この瓶の持つ機能に加え、唐代の詩に描かれる轆轤の分析等を通して、舊注にはない新しい解釋の可能性を探りたい。

一、李賀「後園鑿井」原文と注釋整理

まず、李賀「後園鑿井」（全唐詩卷三九二）を挙げたい。²⁾

李賀「後園鑿井」

井上轆轤

牀上轉

井上の轆轤

牀上に轉すれば

水聲繁

絲聲淺

水聲繁く

絲聲淺し

情若何

荀奉倩

情は若何

荀奉倩

城頭日

長向城頭住

城頭の日

長えに城頭に住まれ

一日作千年

不須流下去

一日を千年と作さん

須いず 流下して去るを

詩題「後園鑿井」は「後園鑿井歌」とする版本もあり、第四句「絲聲淺」は、「絃聲淺」や「弦聲淺」に作る版本があるが、「宣城本」に依って「後園鑿井」、「絲聲淺」とした。また第六句「荀奉倩」の「倩」を「宣城本」は「倩」としていたが、「倩」に改めた。³

李賀の作品には多くの注釋や先行研究がある。ここでは代表的なもの、および、本論の觀點から重要と思われるものを挙げる。

宋・劉辰翁⁴

極似古意。鑿井淺事。獨因轆轤、涉及情事、頗欲係日。

極めて古意に似たり。井を鑿つは淺事なり。獨だ轆轤に因りて、情事に涉及し、頗る日を係がんと欲す。

宋・吳正子⁵

樂府中言汲井、每以美人爲說。如張籍楚妃怨云、梧桐葉下黃金井、橫架轆轤牽素綆。美人睡起天未明、手扶銀瓶秋水冷。此篇歎流光迅速、願日景長住、使壽命延、此情相與終始也。

樂府中に汲井を言うは、毎に美人を以て説を爲す。張籍楚妃怨に「梧桐の葉下 黄金の井、横に轆轤を架けて素綆を牽く。美人睡起するも天未だ明けず、手に銀瓶を扶すれば秋水冷たし」と云うが如し。此の篇流光の迅速なるを歎じ、日景長えに住まり、壽命をして延びしめ、此の情相與に終始せんと願うなり。

明・曾益⁶

此爲情深著作。轆轤藉以汲水、轉無已也。聲繁則不竭、絃淺則水深、水深不竭、猶人情深無已。深情若何。若荀氏奉倩。城頭日、初日。唯其下而不已、故人老而情盡。言爲得長住城頭、俾一日爲千年之計、不少下乎。獨奈何情無已而日易盡也。

此れ情深き者の爲に作るなり。轆轤は藉りて以て水を汲む、轉じて已む無きなり。聲繁ければ則ち竭れず、絃淺ければ則ち水深し、水深くして竭れざるは、猶お人情深くして已む無きがごとし。深情は若何。荀氏奉倩の若し。城頭の日は、初日なり。唯其れ下りて已まず、故に人老いて情盡く。言うところは、焉くんぞ長えに城頭に住まり、一日をして千年の計と爲し、少下せざらしむるを得んや。獨だ情已む無くして日盡き易きを奈何せん。

清・王琦⁷⁾

晉書、拂舞歌詩淮南王篇云、淮南王、自言尊……徘徊桑梓遊天外。長吉此詩略祖其義、而名與調及辭意皆變焉。蓋爲夫婦之相愛好者、思得長相依也。……絃即汲水之繩。水聲與絃聲相和而成音、以比男女相配而成好合。

『晉書』(卷二三、樂志下) 拂舞歌詩「淮南王篇」に云う、「淮南王は、自ら言う 尊しと……桑梓に徘徊して天外に遊ばん」と。長吉の此の詩は略其の義を祖とするも、名と調及び辭意は皆焉を變ず。蓋し夫婦の相愛好する者の爲に、長く相依るを得んと思うなり。……絃は即ち汲水の繩なり。水聲と絃聲と相和して音を成し、以て男女相配して好合を成すに比す。

民國・葉葱奇⁸⁾

『晉書』『拂舞歌詩』『淮南王篇』有『後園鑿井銀作牀、金瓶素綆汲寒漿。』句、這篇題目即取此、不過詩裏的含意却和原作不同。……首句是比興體、拿轆轤和井架比夫婦的諧合依倚。「水聲繁」指情長、「絲聲淺」指世短、和五六兩句意義相貫。既然世短情長、那麼夫妻的情感究竟如何呢。多半像荀奉倩那樣濃厚啊。這是上句問、下句答的句法。後四句說、但願城頭白日長住、一天的光陰像一千年、永不昏暮、即願天長地久的意思。這首含意濃縹、而句法、音響却是擬古歌謠的、很饒古樸之致。

『晉書』(卷二三、樂志下) に引く拂舞歌「淮南王篇」に、「後園に井を鑿ち銀もて牀を作る 金瓶素綆もて寒漿を汲む」という句があり、(李賀の) この詩篇の題目はすなわちここから取ったものだが、詩中の含意は原作と異なっている。……第一句は比興體であり、轆轤と井桁とを用いて、夫婦が仲良く寄り添いあっている様に擬えている。「水聲繁し」とは情が長いことを指し、「絲聲淺し」とは命が短いことを指し、五、六

句の意味と一貫している。命は短く情は長いというからには、夫婦の情は一體どのようなものなのか。恐らくは荀奉倩のように濃いものだろう。これは上の句で問い、下の句で答える句法である。最後の四句は、城頭の白日が永遠にとどまり、一日の時間があたかも一千年のようで、永遠に日が暮れなければいいのにと願っているが、これは天は長く地は久しくあらんことを願うのである。この詩に詠われる情は非常に濃密であるが、句法や響きは逆に古歌謠に擬し、大變古風で質朴な趣きがある。

この他、邦譯四種を舉げる。⁹⁾

鈴木虎雄『李長吉歌詩集・下』¹⁰⁾

井のうえの轆轤（釣瓶をつりあげるための「ろくろ」仕掛け）が牀上（井戸側のうえ）で回轉する、水の聲はしげくやまぬが、わたし（女）の心もちを托する絃の聲は浅い。あの人の情は、妻を愛したあの、荀奉倩とくらべてどうだろう。『城のうえを照らす太陽はいつでも城のうえにとまっている。どうか愛されているこの一日を千年にもしたい、太陽は流れて落ちてゆく必要はない（いつまでもじっとしてくれればよい）。』

齋藤响『漢詩大系一三・李賀』¹¹⁾

井戸のろくろがくるりくるり、いげたのうえでまわっている。水汲む音はひっきりなしに高く、繩繰る音は、やんわり低く。このころもちはどうなのよ。いといい、あたしの荀奉倩さん？お城の上のおてんとさまに、いつまでもお城の上に出ていてもらて、このままじっと一日を千年萬年にひきのばし、どうぞ沈むことがないように。

黒川洋一『李賀詩選』¹²⁾

「水聲繁、絃聲淺」水聲は水を汲み上げる音、絃聲は繩のろくろを軋る音。二句は水聲と絃聲の相和することをもって、男女の和合のひゆとしたもの。

「情若何」あなたのわたしに對する愛情はどうなのか。あなたの愛情を疑わない。若何は如何に同じく、どうであるかの意。

井戸への轆轤がくるくると 井桁の上で回っている 汲む水音はざあざあと 繰る綱聲はしめやかに あなた わたしをどうする氣 いといわ

たしの奉倩さん 町の上のおてんとさんよ いつまでもお空に止まって 一日を千年にも引き延ばし どうぞ沉まずにいておくれ

原田憲雄『李賀歌詩編・二』¹³

「荀奉倩」荀粲、奉倩はその字、潁陰（河南）の人。……愛妻家の代表として人々に記憶された。

「井戸のろくろが桁でくるくる 水はざぶざぶ 縄がさらさら お氣持いいかが 荀奉倩さん」「町のうえのお日さん そこでじいっとしておいで 一日を千年にして 沉んではいけないよ」

また詹滿江氏は李賀「後園鑿井」について、「井戸の轆轤がいつまでも回り続けるように、夫婦の情愛がずっと絶えないことをうたった作」としている。¹⁴

王琦や葉葱奇が指摘するように、『後園鑿井』は、『樂府詩集』卷五四等に記載がある「淮南王篇」が典故となっている。¹⁵

淮南王 自言尊

淮南王は 自ら言う 尊しと

百尺高樓與天連

百尺の高樓 天と連なる

後園鑿井銀作牀

後園に井を鑿ち銀もて牀を作る

金瓶素綆汲寒漿

金瓶素綆もて寒漿を汲む

汲寒漿 飲少年

寒漿を汲み 少年に飲ましむれば

少年窈窕 何能賢

少年窈窕として 何ぞ能く賢なる

揚聲悲歌音絕天

聲を揚げて悲歌すれば 音は天に絶す

我欲渡河河無梁

我は河を渡らんと欲すれども河に梁なし

願化雙黃鵠還故鄉

願わくは雙黃鵠と化して故郷に還らん

還故鄉 入故里

故郷に還りて 故里に入らん

徘徊故鄉苦身不已

故郷に徘徊して身を苦しめて已まず

繁舞寄聲無不泰 繁舞 聲を寄せて泰らかならざる無し
徘徊桑梓遊天外 桑梓に徘徊して天外に遊はん

ここで注釋と先行研究を整理する。第三、四句について、曾益は「聲繁則不竭、絃淺則水深、水深不竭、猶人情深無已。」と述べ、この二句をいずれも男女の情が深いことの喩えと解釋する。王琦、黒川氏は「水聲と絃聲と相和して音を成し」とし、男女の仲の良さに喩えていると述べている。葉氏は、第三、四句は情が長いことと命が短いことの對比であるとするが、男女は互いに深く思い合っていると解釋する。詹氏も夫婦の情愛が途切れないことを詠っていると述べている。鈴木氏は「絃」を女性の氣持ちを表す「こと」とであるとし、男性の心變わりに對する不安を讀み取っている。

以上のように、鈴木氏以外はいずれも男女の情は相和し、互いに深く思い合っていると解釋している。

二、李賀「後園鑿井」解釋——第一、二句・「井上轆轤 牀上轉」

李賀「後園鑿井」の分析を始めるにあたり、まず詩歌に描かれた井戸について概観したい。

以前筆者は、漢代以降の「詩歌に現れる井戸描寫」を分析し、代表例として「荒廢した故宅に残された井戸」と「離れた地にいる戀人を思い、水を汲む人物と共に描かれる井戸」があることを指摘した。¹⁷ 上記二つのタイプの他に、井戸と瓶を次のように用いた作品がある。

釋寶月（齊）「估客樂・其二」¹⁸

有信數寄書 無信心相憶

信有らば 數書を寄せよ

信無ければ心に相憶う

莫作瓶落井 一去無消息

作す莫かれ 瓶の井に落ち

一たび去りて消息無きを

戀人からの消息がなくなることを、井戸底に落ちる瓶に託して詠っている。管見の限りこのタイプの作品は、唐以前はこれ一首の他に殘されてない。しかし唐代には李嬌「倡婦行」（全唐詩卷六一）、李白「寄遠十二首・其八」（全唐詩卷一八四）等、少なからず見受けられる。¹⁹

唐代になると、このような作品に加え、井戸繩が切れて落下する瓶や、轆轤の回轉につれて上下する瓶が、女性の運命に重ね合わせられる作品が登場する。王昌齡「行路難」(全唐詩卷一四一)、白居易「井底引銀瓶——止淫奔也」(全唐詩卷四二七)、顧況「悲歌六首・其三」(全唐詩卷一九・卷二六五)を擧げる。

王昌齡「行路難」¹⁹

雙絲作綆繫銀瓶
百尺寒泉轆轤上
懸絲一絕不可望
似妾傾心在君掌
人生意氣好遷捐
只重狂花不重賢
宴罷調箏奏離鶴
迴嬌轉盼泣君前
君不見眼前事
豈保須臾心勿異
西山日下雨足稀
側有浮雲無所寄
但願莫忘前者言
剝骨黃塵亦無愧
行路難 勸君酒
美酒千鍾猶可盡
心中片愧何可論

莫辭煩

雙絲 綆を作りて銀瓶を繫く
百尺の寒泉 轆轤の上
懸絲一たび絶つれば望む可からず
妾が心を傾けて君が掌に在るに似たり
人生意氣 好く遷捐し
只だ狂花を重んじて賢を重んぜず
宴罷み箏を調べて離鶴を奏し
迴嬌轉盼 君前に泣く
君見ずや 眼前の事
豈保たんや 須臾も心異なること勿きを
西山日下 雨足稀なり
側らに浮雲の寄る所無き有り
但だ願わくは前者の言を忘るる莫かれ
剝骨黃塵 亦た愧づる無し
行路難し 君に酒を勸む 煩を辭する莫かれ
美酒千鍾 猶お盡く可し
心中片愧 何ぞ論ず可き

一聞漢主思故劍
使妾長嗟萬古魂

一たび漢主の故劍を思ふを聞けば
妾をして長嗟せしむ 萬古の魂を

白居易「井底引銀瓶——止淫奔也」(一部)^⑩

井底引銀瓶

井底 銀瓶を引く

銀瓶欲上絲繩絕

銀瓶上がらんと欲して絲繩絶つ

石上磨玉簪

石上 玉簪を磨く

玉簪欲成中央折

玉簪成らんと欲して中央より折る

瓶沉簪折知奈何

瓶沉み簪折る 知んぬ奈何

似妾今朝與君別

妾が今朝君と別るるに似たり

顧況「悲歌六首・其三」^⑪

新繫青絲百尺繩

新たに繫く青の絲 百尺の繩

心在君家轆轤上

心は君の家の轆轤の上に在り

我心皎潔君不知

我が心皎潔なるを君は知らず

轆轤一轉一惆悵

轆轤一たび轉すれば一たび惆悵たり

これらの作品を読み解くに際し、後漢揚雄「酒箴」に注目したい。「酒箴」は『漢書』卷九二「遊俠傳・陳遵」に記載されている。

先是黃門郎揚雄作酒箴以諷諫成帝、其文爲酒客難法度士、譬之於物曰、

子猶瓶矣。觀瓶之居、居井之眉、處高臨深、動常近危。酒膠不入口、臧水滿懷。不得左右、牽於纒微。一旦東嶺、爲甞所輻。身提黃泉、骨肉

爲泥。自用如此、不如鴟夷……。

是に先だち黄門郎揚雄は酒箴を作りて以て成帝を諷諫す、其の文酒客の法度の士を難るを爲し、之を物に譬えて曰く、

子は猶お瓶のごとし。瓶の居を觀るに、井の眉（井戸端）に居りて、高きに處りて深きに臨み、動けば常に危うきに近づく。酒醪（濁り酒）は口に入れず、水を臧めて懷を滿たす。左右するを得ず、纒徽（井戸繩）に牽がる。一旦裏（か）かり礙げらるれば、甕（井戸の内側にある瓦の壁）の輻（は）つ所と爲る。身を黄泉（なま）に提ち、骨肉泥と爲る。自用此くの如くんば、鴟夷（酒を入れる革袋）に如かず……。

『漢書』の記載に依ると、王莽に才能を認められた陳遵は酒を愛飲し、好事家に疑問を質されると經典を持ち出して反論する友人張竦に對し、常に「酒箴」を語った。陳遵は「酒箴」を借りて、張竦を井戸繩に繋かれ、不自由で且つ危険と隣り合わせの瓶に、豪膽な性格で酒飲みである自分を鴟夷に擬えている。時をおかず王莽は敗走し、張竦は賊兵に殺されてしまう。「身提黄泉」とあるように、「瓶」に喩えられた張竦は黄泉に投げられ落命した。井戸底は黄泉に通じていたのである。

この揚雄「酒箴」と併せて注目したいのが、壺狀の容器が魂の依り代であったとする小南一郎氏の論考「壺型の宇宙」である。小南氏に依れば、三國（東吳）から西晉にかけての時期、長江下流域の墓にしばしば神亭壺という壺が納められた。死者の魂はこの神亭壺を通じて祖靈達の世界へ赴き、逆に死者の魂を招く際はこの壺が依り代となつて魂がこの世に歸るとされ、浙江省一帯では今でも同様の壺が「魂瓶」等と呼ばれているとある。また後漢楊氏墓から出土した壺上の朱書には、「瓶」を経過して死後の世界に赴くと記され、同様の壺に「神瓶」や「解注瓶」等と自名している例があることを指摘する。

このように、瓶を含めた壺狀の容器は、魂を宿す依り代としての機能を持つ道具であった。黄泉へと通じる井戸の上に高く揚げられ、いつ何時碎かれるとも知れず昇降を繰り返す瓶は、「魂の容れ物」であることによつて、「法度の士」張竦の危うさを表現していたのである。

瓶を「魂の容れ物」とする觀念を踏まえることで、先に擧げた王昌齡「行路難」、白居易「井底引銀瓶」、顧況「悲歌六首・其三」をより興味深く読み解けるであらう。「酒箴」において「法度の士」張竦の不安定さが表現された瓶は、王昌齡「行路難」では、夫の心變わりによつて婚家を去らなければならない女性に重ね合わせられている。泉の上高く轆轤にかけられた瓶は女性の「魂の容れ物」であり、夫の心次第でいつ奈落の底へと落とされるともしれない、女性の運命の危うさを暗示しているのである。

白居易「井底引銀瓶」もまた、瓶を女性の「魂の容れ物」とする觀念を背景に作られたものといえるであらう。瓶は地上に上がろうしたもの、頼りとする井戸繩が切れてしまう。今朝男性と別れた女性は、井戸底に沉んだ瓶も同じなのである。

顧況「悲歌六首・其三」も同様に、男性の心變わりによる女性の悲しみを描く作品であり、「新繫青絲」は、夫が新しい妻を迎えたことを暗示すると思われる。この詩には「瓶」の語は見えないが、心は轆轤の上在り、轆轤の轉ずるにつれ失意は深まると詠われることからすれば、前二作と同様、壺狀の容器を「魂の容れ物」とする觀念を背景にもつものである。王昌齡「行路難」にも轆轤が描かれていることを考慮すれば、轆轤はいつ愛情を他に移すとも知れない「男性の心」を表していると考えられる。瓶は井戸繩に繋がっており、繩が切れることで決定的な斷絶へと誘われるが、繩以外にも瓶を操り井戸底へと沈める道具が「轆轤」なのである。追ひ出された妻は、まだ夫を思い、その心に翻弄されたことを思つて悲しみを深めている。

この作と同じく、「瓶」は直接詠われていないが、それを翻弄するものとしての「轆轤」が描かれる作品は他にもある。陸龜蒙「井上桐」（全唐詩卷六三〇）を擧げる。

陸龜蒙「井上桐」

美人傷別離	汲井長待曉	美人	別離を傷み	井に汲みて長えに曉を待つ
愁因轆轤轉	驚起雙棲鳥	愁う	轆轤の轉ずるに因り	雙棲の鳥を驚起せしむるを
獨立傍銀牀	碧桐風嫋嫋	獨り立ちて銀牀に傍えば		碧桐の風 嫋嫋たり

これは井戸を描く詩のひとつの型である「離れた地にいる戀人を思い、井戸の水を汲む人物を描いた」作品だが、轆轤が詠われていることで異なる様相を見せている。「井上桐」では、轆轤が回轉することによつて、つがいで寄り添っていた鳥が飛び立つてしまふ。先に擧げた王昌齡と顧況の詩の轆轤の用法からすれば、この詩の女性を悲しませているのは、戀人との別離に加え、その心が「轉」ずるかもしれないという不安であると考えられよう。井戸繩同様、轆轤も女性の將來を左右する道具として描かれているのである。

井戸と轆轤を詠うとはいえ、「後園鑿井」には前四作のように明らかな悲哀の色はなく、「瓶」も登場していない。しかし王昌齡「行路難」、顧況「悲歌六首・其三」、陸龜蒙「井上桐」において、轆轤の回轉は女性の運命を左右するものであり、それは「瓶」に言及しない「悲歌六首・其三」と「井上桐」においても同様であった。「後園鑿井」該當句も同様に、女性の「魂の容れ物」としての瓶の存在を前提とし、その瓶が轆轤に従つて上下する悲しみを詠うのではないだろうか。

この假説を検證する爲に、「後園鑿井」第二句に使われ、顧況「悲歌六首・其三」や陸龜蒙「井上桐」でも詠われる「轉」の字について考えた
い。「轉」は『詩經』『鄒風』『柏舟』に、

我心匪石	不可轉也	我が心	石に匪ざれば	轉がす可からず
我心匪席	不可卷也	我が心	席に匪ざれば	卷く可からず
威儀棣棣	不可選也	威儀棣棣として		選たる可からず

とあり、「不可轉」の語によつて自分が心變わりしない様が表現されている。同様の用法は以後も使用され、次のような例が見受けられる。

「古詩爲焦仲卿妻作」(一部)²⁰

君當作磐石	妾當作蒲葦	君は當に磐石と作るべし	妾は當に蒲葦と作るべし
蒲葦紉如絲	磐石無轉移	蒲葦は紉なること絲の如く	磐石は轉移無し

何遜(梁)「和蕭諮議客離閨怨詩」(一部)

昔期今未返	春草寒復青	昔期するに今未だ返らず	春草	寒くして復た青し
思君無轉易	何異北辰星	君を思いて轉易する無し	何ぞ北辰の星と異ならん	

「古詩爲焦仲卿妻作」では石の「無轉移」、「和蕭諮議客離閨怨詩」では北辰星の「無轉易」が、心の移ろわぬ様を表している。『詩經』以來、「轉」という語は、人の心變わりを連想させるものとして使われてきた。「後園鑿井」第一、二句「井上轆轤、牀上轉」からは、女性が思いを寄せ
る男性の心が定まらず移ろう様子が読み解けるのではないだろうか。

最後に、轆轤を詠んだもうひとつの作品、李商隱「無題四首・其二」(全唐詩卷五三九)を検討したい。

李商隱「無題四首・其二」³⁷

颯颯東風細雨來

颯颯たる東風 細雨來たる

芙蓉塘外有輕雷

芙蓉塘外 輕雷有り

金蟾蜍燒香入

金蟾 鑊を留むも香を燒きて入り

玉虎牽絲汲井迴

玉虎 絲を牽き井を汲みて迴る

賈氏窺簾韓掾少

賈氏 簾を窺えば韓掾少く

宓妃留枕魏王才

宓妃 枕を留むれば魏王才あり

春心莫共花爭發

春心 花と共に發するを爭うこと莫かれ

一寸相思一寸灰

一寸の相思 一寸の灰

第三句の「金蟾」は「香爐」とする説や「かけがねの飾り」とする説、第四句に登場する「玉虎」は、「井桁あるいは水を汲む瓶の飾り」とする説や「轆轤」とする説、「絲」は「井戸繩」とする説がある。³⁸ 川合康三氏はこの二句を、「金のがまが鎖を噛む香爐、焚かれた香が部屋に入っていく。玉の虎を装った井戸、つるべを引き水を汲み上げながら轆轤が回る」と譯し、「冒頭二句は風、雨、そして雷によって戀の豫兆をあらわす。續く「金蟾」、「玉虎」の聯は室内外の物によって、おそらくは情事そのものを暗示する。「金蟾」の句は男、「玉虎」の句は女、と分けられるかもしれない。」と解説を附している。³⁹ しかし先に舉げた陸龜蒙「井上桐」において、女性の愁いは轆轤の回轉から生じている。男性の心變わりによって將來起こるかもしれない愛情の破綻が、飛び立つつがいの鳥によって表現されていることからすれば、「玉虎」の句は「情事そのものを暗示する」といえるだろうか。

「轆轤」が登場する作品は、他にも次のようなものがある。

南唐中主李璟「應天長」⁴⁰

一鉤初月臨妝鏡

一鉤の初月 妝鏡に臨み

蟬鬢鳳釵慵不整

蟬鬢 鳳釵 慵くして整えず

重簾靜 層樓迥
惆悵落花風不定

重簾靜かに 層樓 迥かに
惆悵す 落花に風定まらざるを

柳堤芳草徑

柳堤 芳草の徑

夢斷轆轤金井

夢は斷たる 轆轤金井のおとに

昨夜更闌酒醒

昨夜 更闌けて酒醒め

春愁過卻病

春愁 病に過^す却たり

三日月のような眉を持った女性が、身だしなみを整えようとする氣持ちすら起きない様子が冒頭に描かれる。かつて男性と歩いたのであろうか、夢の中で柳が立ち竝ぶ堤と草香る小道を歩くが、その夢は轆轤の音によって破られてしまう。夢での楽しい一時が轆轤の音によって中断され、女性の愁いはより沉痛なものとなる。

また牛嶠「菩薩蠻・其七」でも、

牛嶠「菩薩蠻・其七」(二部)^①

玉樓冰簟鴛鴦錦

玉樓 冰簟 鴛鴦の錦

粉融香汗流山枕

粉は融け香れる汗は 山枕に流る

簾外轆轤聲

簾外 轆轤の聲

斂眉含笑驚

眉を斂め 笑^えを含みて驚く

とあり、男性との逢瀬を楽しむ女性が、簾の外から聞こえた「轆轤聲」にふと我にかえり、眉を擧めている。

この二つの詞の女性は、戀人と過ぐす楽しい時間を轆轤の聲によって邪魔されている。轆轤の微かなきしりが、二人の時間に龜裂をもたらし、女性は愁いに沉むのである。「轆轤」が廻り水を汲むことが情事を暗示するものならば、何故このようなことが起こるのだろうか。轆轤の音は二人

の楽しい一時を終わらせる夜明けの合圖でもあったかもしれない。しかし、轆轤が男性の心變わりを暗示するからこそ、「應天長」の女性は、戀人の心を失ったという現實に引き戻され、「菩薩蠻・其七」の女性は、この逢瀬が長くは續かないことを思い、眉を顰めるのではないか。

では李商隱「無題四首・其二」の第三、四句はどのように讀めばよいだろうか。遠くから微かに傳わる雷と細かな雨を描く冒頭二句は、川合氏の通り「戀の豫兆」を表すものだろう。そこから、燃え上がった戀が「灰」となる末尾まで、この詩は女性の戀心の軌跡を描いている。しかも川合氏が指摘するように、第五、六句に引かれる故事は、これが道ならぬ戀であることを示している。作品全體をこのように捉えた上で、筆者は第三、四句を、抑えようとしても抑えられず、男性を思う女性の心が動き出す様を描くものと考えたい。

川合氏は「金蟾」を「ひきがえるの形をした黄金の香爐」とし、『鏤』は「香爐のつまみ、あるいは香爐の飾りの鎖」とする。しかしこは道源が「蟾善閉氣、古人用以飾鏤（蟾は善く氣を閉づ、古人用いて以て鏤を飾る。）」と注し、朱彝尊がこの二句を「鏤雖固、香能透之、井雖深、絲能及之（鏤固しと雖も、香能く之を透る、井深しと雖も、絲能く之に及ぶ。）」と解するのに従いたい。²²「鏤」は扉の錠前であり、「蟾」はよく氣を閉ざすと考えられたことからその飾りとされた。「香入」は、李白「贈宣城趙太守悅」（全唐詩卷一七一）「焚香入蘭臺」や、顧況「送使君」（全唐詩卷二六六）「焚香入瑣闌」等に詠われるように、香がある場所に入ってくる様子を表しており、第三句は「蟾を飾つた錠前が、扉を固く閉ざしているのに、香の煙が入ってくる」、第四句は「井戸は深いけれども、轆轤が回轉するにつれ、水が汲み上げられる」と解することが出来る。²³後述する孟郊「列女操」では、從容として夫に殉じる妻の心を「井中水」と表現している。金蟾によって閉ざされた部屋と井戸の底の水は、女性の心を表し、忍び寄る香の煙と轆轤の回轉は、男性からの求愛、あるいは、第五句で賈氏の心を捉えた韓壽の美貌のように、女性を誘引する男性の力を表すものだろう。女性はこれが許されぬ戀であることを知り、一層固く扉を鎖し、より深い地の底へと身を潜めるが、香の浸入と廻る轆轤にはなす術もない。

これまで擧げてきた詩の中で、「轆轤」の回轉は、戀が成就した後の、男性の心變わりを暗示するものだった。李商隱「無題四首・其二」では、この用法を踏まえつつ、戀の過程のもうひとつ前の段階で使われているものと考ええる。つまり、この詩の轆轤の回轉は男性からの求愛、あるいは誘引であり、躊躇う女性を戀の成就へと導いていくが、それはまた何時か別の女性の心を動かすものであることが暗示されているのである。女性はそれを知るからこそ、ときめく心を抑えようとするのであり、全ては「灰」となった後の悲しみも深い。

以上のように、「無題四首・其二」においても、轆轤の回轉を情事の暗示とするには決め手を缺き、むしろ他の詩詞と同様、移ろいやすい男性の心を表すものと讀むことで、一篇はより一層深い陰影を帯びたものとなる。「後園鑿井」の冒頭「井上轆轤、牀上轉」も、同様の意味で理解したい

と考えるのである。³⁴

三、李賀「後園鑿井」解釋——第三、六句・「水聲繁 絲聲淺 情若何 荀奉倩」

では第三、四句の「水聲繁、絲聲淺」は何を意味しているのか。これに關連し、孟郊「列女操」(全唐詩卷二三・卷三七二)を擧げる。

孟郊「列女操」³⁵

梧桐相待老 鴛鴦會雙死

梧桐は相待ちて老い

鴛鴦は會ず雙んで死す

貞婦貴徇夫 捨生亦如此

貞婦は夫に徇ずるを貴ぶ

生を捨つるも亦た此くの如し

波瀾誓不起 妾心井中水

波瀾 誓つて起さず

妾が心は井中の水

梧桐や鴛鴦が竝んで死ぬのと同様、貞婦は夫に身を殉じて命を捨てる。しかし女性の心は波立たず、それはまるで井中の水のように平靜だ、と詠われる。水は本來動きを伴うものだが、井中の水が、節を守つて動じない女性の心を表している點に注目したい。『易』「井」巽下坎上に、

井、改邑不改井。无喪无得。往來井井。汔至亦未繙井。羸其瓶、凶。

井は、邑を改むれど井を改めず。喪うこと无く得ること無し。往くも來るも井を井とす。汔^{ほん}と至らんとするも亦た未だ井を繙^{つる}せず。其の瓶を羸^はる、凶なり。

とあるように、井戸は動かないものであった³⁶。また『經典釋文』や『風俗通』に依れば、井戸は清廉さや徳、法、節度と結びつけられ、人々に恩恵をもたらすものと考えられていた。³⁷ 孟郊「列女操」もこの『易』が背景にあり、本來流動性のある水が波立たないことによって、節に殉じる女性の心を喩えたと思われる。

一方、徐幹(魏)「室思詩」、李白「寄遠十二首・其六」(全唐詩卷一八四)では、流れてやまない水によって、男性を思ふ女性の心が詠われる。

徐幹（魏）「室思詩」（一部）

浮雲何洋洋	願因通我辭	浮雲 何ぞ洋洋たる	願わくは因りて我が辭を通ぜん
飄飄不可寄	徙倚徒相思	飄飄として寄す可からず	徙倚して徒に相思う
人離皆復會	君獨無返期	人離れては皆復た會するに	君獨り返る期無し
自君之出矣	明鏡暗不治	君の出でし自り	明鏡暗くして治せず
思君如流水	何有窮已時	君を思ふこと流水の如し	何ぞ窮まり已む時有らん

李白「寄遠十二首・其六」（一部）

陽臺隔楚水	春草生黃河	陽臺 楚水を隔て	春草 黃河に生ず
相思無日夜	浩蕩若流波	相思うこと日夜無く	浩蕩 流波の若し

「列女操」に詠われる井中に静かにとどまる水も、徐幹「室思詩」、李白「寄遠十二首・其六」にある浩蕩として流れる水も、どちらも女性の心を表しているのである。

李賀「後園鑿井」の「水聲」は、先に擧げた黒川氏の指摘のように、水を汲み上げる時に出る音であろう。魂の依り代である瓶に汲み上げられ、本來は平靜である井中の水が、轆轤の回轉するにつれ、激しく波立ち、音を立てている。「水聲繁」の句には、男性を思ふ女性の心の激しさが表現されているのではないだろうか。

次に、第四句「絲聲淺」について考えたい。

井戸繩は、白居易「井底引銀瓶」にある「絲」「繩」、王昌齡「行路難」や元稹「夢井」にある「綆」、李涉「六歎」（全唐詩卷四七七）「上有轆轤青絲索」等で詠われる「索」で表されることが多く、「絃」「弦」で井戸繩を指す詩は見つけられなかった。これを踏まえ、底本の「宣城本」通り「絲」の字を採用して「井戸繩」の意とし、「絲聲」を「井戸繩の音」と取る。

では、「水聲繁」に對し、「絲聲淺」とは何を表しているのだろうか。『全唐詩』および『先秦漢魏晉南北朝詩』を調べたところ、「繁」と「淺」

を對として用いている用例は、この「後園鑿井」と、同じく李賀の作品である「神絃曲」(全唐詩卷二一、卷三九三)二首のみであった。「繁」と「淺」の對は李賀独自の表現といえるであらう。以下に李賀「神絃曲」を擧げる。

李賀「神絃曲」(一部)

西山日沒東山昏 西山 日沒して東山昏し

旋風吹馬馬踏雲 旋風 馬を吹いて馬は雲を踏む

畫絃素管聲淺繁 畫絃 素管 聲 淺繁

花裙萃蔡步秋塵 花裙萃蔡 秋塵を歩む

「畫絃」美しく彩色された弦樂器と、「素管」飾り氣のない管樂器の音が、「淺繁」であると詠われている。「畫」と「素」が對を爲すことからしても、「淺」と「繁」は相對立する意味で使われているのは明らかであらう。³⁸⁾

王琦、黒川氏は、「水聲繁」の「繁」と、「絲聲淺」の「淺」を水音と繩の音とが相和しているとし、曾益もこの二句を合わせて男女の情が互いに深く調和していることと解釋しているが、「神絃曲」の用例を考慮すれば妥當とはいえないと思われる。

「淺」の意を理解する爲に、張祐「車遙遙」(全唐詩卷二五、卷五一〇)を擧げたい。

張祐「車遙遙」³⁹⁾

東方囓囓車軋軋

地色不分新去轍

閨門半掩牀半空

斑斑枕花殘淚紅

君心若車千萬轉

妾身如轍遺漸遠

東方 囓囓として 車 軋軋

地色分かれず新たに轍を去る

閨門半ば掩い 牀半ば空し

斑斑たる枕花 殘淚紅なり

君が心は車の千萬轉するが若く

妾の身は轍の遺りて漸く遠ざかるが如し

碧川 迢迢山宛宛

碧川 迢迢として山は宛宛たり

馬蹄在耳輪在眼

馬蹄 耳に在り 輪 眼に在り

桑間女兒情不淺

桑間の女兒 情は淺からず

莫道野蠶能作繭

道う莫かれ 野蠶能く繭を作るかと

第五句では、男性の心は車が「轉」じるようだとして述べて男の心變わりを歎きつつ、第九句において自分の情は「淺」くはない、と表現している。この作品以外にも、女性が男性を思ふ詩ではないが、李白「送族弟凝之滌求婚崔氏」（全唐詩卷一七五）、「酬岑勛見尋就元丹丘對酒相待以詩見招」（全唐詩卷一七八）等にも、男性が友人の男性や親族に對して「情不淺」と詠う例がある。¹⁰「情不淺」という語は、相手を思ふ情が深いという意味で用いられているのである。

先に挙げた李賀「神絃曲」では、「繁」「淺」は、「畫」「素」と同様、兩極端のことを述べ、その間の様々な音色が混在していることを表す用法である。「水聲繁」「絲聲淺」と二句に分けて用いられる「後園鑿井」においては、「水聲」と「絲聲」の間の隔たりを鮮明にするのが「繁」と「淺」の對ではないだろうか。水音が立ち、女性が男性を思ふ心は繁く激しいにもかかわらず、自分に對する男性の情が深くないことを、「絲聲淺」で表現していると考えたい。葉氏は「絲聲淺」を命が短いことの喩えとしているが、「水聲と絃聲と相和して音を成し」とする王琦、「絃淺ければ則ち水深し」とする曾益同様、根據は擧げられていない。また鈴木氏は、「絃」が女性の氣持ちを表す「こと」とであるとする點で、この句は男性の心を表すとする筆者の見解とは異なるが、男性の心變わりに對する不安を読み取る點は、筆者と通じる。

次に、第六句に登場する「荀奉倩」がどのような意味合いを有するのかを検討したい。荀粲（字は奉倩）については『世說新語』『惑溺篇』や『文學篇』等に記載がある。以下、『世說新語』『惑溺篇』所引劉孝標注を擧げる。¹¹

粲別傳曰、粲常以婦人才智不足論、自宜以色爲主。驃騎將軍曹洪女有色、粲於是聘焉。容服帷帳甚麗、專房燕婉。歷年後婦病亡。未殯、傳嘏往嘏粲、粲不明而神傷。嘏問曰、婦人才色、竝茂爲難。子之聘也、遺才存色、非難遇也。何哀之甚。粲曰、佳人難再得。顧逝者不能有傾城之異、然未可易遇也。痛悼不能已已。歲餘亦亡、亡時年二十九。粲簡貴、不與常人交接、所交者一時俊傑。至葬夕、赴期者裁十餘人、悉同年相知名士也。哭之、感慟路人。粲雖褊隘、以燕婉自喪、然有識猶追惜其能言。

荀粲別傳には次のようにある。「荀粲はいつも、婦人の才知は論ずるに足りず、元々容色を主とすべきだ、としていた。驃騎將軍曹洪の娘は容色が優れており、荀粲はそこで彼女を娶った。儀容、服飾、道具は大變に麗しく、愛情を一身に受け仲が良かった。數年後、妻は病死した。まだかりもがりをしていない時、傳嘏が荀粲を弔問に行くと、荀粲は呆然とし憔悴していた。傳嘏が「婦人の才知と容色は、共に優れているものは得難い。貴方の結婚は才知を棄て容色をとった、二度と遇うことは難しいというわけではないのに、何故そのように嘆くのか」と尋ねた。荀粲は『美人は二度と得られない。思えば亡くなった妻は國を傾ける程の世に稀なものがあつたわけではないが、それでも容易く遭遇出来るものではない』と言ひ、悼み悲しんで止まなかつた。一年餘りで荀粲も亡くなり、享年二十九であつた。荀粲は大らかで上品、常人と交わらず、交わるものは皆當代の英傑であつた。葬式の夕べになり、會葬するものはわずかに十餘人であつたが、皆同年の仲の良い名士であつた。これを哭せば、道行く人々を感動させた。荀粲は一途な男で、夫婦仲が良かったことで自ら死を招いたが、有識者達はそれでも彼の言論が優れていたことを思つてこれを惜しんだ。」

この記載に依れば、荀奉倩は一途な性格であり、女性の容色に價値を見いだしていた。彼が亡くなった原因は妻の病死による悲しみが深かつた爲だが、妻は美貌の持ち主だったからこそ、亡くなつても荀奉倩の愛情を受けられたともいえる。李賀「後園鑿井」における荀奉倩は、先に擧げた原田氏の注にある「愛妻家の代表」というだけではなく、女性の容色に執着した人物であることを讀み解くべきではないだろうか。

五、李賀「後園鑿井」解釋——第七句と十句・時間と太陽

最後に、第七句から第十句「城頭日、長向城頭住。一日作千年、不須流下去」を検討したい。

詩中の女性は「一日作千年」と述べ、太陽に留まるよう懇願している。李賀は、太陽の動きを止め時間が流れないようにと願う様を、「梁臺古愁」(全唐詩卷三九三)でも詠っている。

李賀「梁臺古愁」^⑧

梁王臺沼空中立

梁王の臺沼 空中に立ち

天河之水夜飛入

天河の水 夜 飛びて入る

臺前闘玉作蛟龍

臺前 玉を闘わせて蛟龍と作し

綠粉掃天愁露濕

綠粉 天を掃いて露の濕おすを愁う

撞鐘飲酒行射天

鐘を撞き酒を飲み 行くゆく天を射る

金虎蹙裘噴血斑

金虎の蹙裘 噴血 斑なり

朝朝暮暮愁海翻

朝朝暮暮 海の翻るを愁う

長繩繫日樂當年

長繩もて日を繋ぎ當年を樂しむ

芙蓉凝紅得秋色

芙蓉 紅を凝らして秋色を得たり

蘭臉別春啼脉脉

蘭臉 春に別れて啼くこと脉脉たり

蘆洲客雁報春來

蘆洲の客雁 春を報じ來たる

寥落野湟秋漫白

寥落たる野湟 秋 漫りに白し

「梁臺」は漢景帝の同母弟である梁の孝王が作った宮殿である。冒頭二句では、宮殿ばかりか、それを取り巻く庭園までも空中高く浮いていると詠われている。その梁臺で、梁の孝王は鐘を鳴らして酒宴を催し、長い繩で太陽を繋いで時間を止め、享樂が永遠に続くようにと願ったが、かなわなかった。春と秋とは代わる代わる訪れ、芙蓉と蘭花を枯らし、眼前には寂しい光景が廣がるばかりである。

梁の孝王の願いの裏には、今の享樂が終わってしまうことへの恐怖がある。「後園鑿井」の女性も、今の幸福の永續を願っている。時間の経過は自分の容色を衰えさせ、苟奉情のような男の心變わりを促すからである。しかし時は止められず、梁の孝王同様、女性の願いはかなわないのである。

終わりに

以上を踏まえ、李賀「後園鑿井」の解釋に戻りたい。

井戸の轆轤が井桁の上で回轉する

愛しい人が心をよそに移すのではないかという不安から

瓶が水を汲み上げる音は激しさを増す 私のあなたへの思いはつのる

しかし水音の激しさとは反対に 井戸繩をくる音はか細い

私への情はどうなのでしょう

苟奉情のようにあなたは容色を重んじるのでしょうか

町の上の太陽よ どうか永遠にここにとどまって下さい

そうすれば今日一日を千年に出来るから

自分の容色が衰えず貴方の愛情も絶えないように 太陽よ、沉まずにいて欲しい

「後園鑿井」は、今の幸福な状況が、轆轤の回轉によつていつ何時壊れるかもしれないという不安が前半四句で詠まれ、この幸福がこれからも續いて欲しいという願いが後半に託されていると筆者は考える。

女性が戀人を思ふ際に井戸に言及する詩は、六朝の、遠くにいる人を思つて水を汲む詩以來數多く作られた。轆轤は唐代になつてからこれらの詩に加わる。李賀「後園鑿井」は、轆轤を詠う唐詩の中では様相を異にする。それは、轆轤の音ではなく、汲み上げられる水の音、繩の音に言及していること、女性の悲哀が明確には表現されていないことである。この詩に對し、男女の情が相和するものとする解釋が生まれる理由はここにある。しかし、轆轤と「轉」の用法や、李賀における「繁」と「淺」の意味を検討するならば、「後園鑿井」も轆轤に翻弄される瓶の悲しみを前提とし、李賀独自の創作を加えたものと考えられるのである。

- (1) 『東方學』一一六、二〇〇八年。
- (2) 以後本稿では、唐以前の詩や作者は逯欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』（中華書局、一九八三年）に依り、『文選』『玉臺新詠』『樂府詩集』に輯録される作品はこれらも参照した。唐詩は『全唐詩』（中華書局、一九六〇年）に依り、諸本を参照した際はその都度注記した。検索は『先秦漢魏晉南北朝詩』CD-ROM（凱希メディアサービス、二〇〇四年）および『寒泉全唐詩』（<http://lib.tupm.gov.tw/525/>）を使用した。
- (3) 野原康宏『宋本李賀詩集について』（『颯風』三八、二〇〇五年）に依れば、李賀の詩集には宋本が二種類残っている。ひとつは、北宋末年の原刻で外集一卷が南宋初年に増刊されたとされる『李賀歌詩編』（所謂「宣城本」）であり、もうひとつは、南宋に成立したとされる『李長吉文集』（所謂「宋蜀本」）である。以後本稿で李賀の詩を取り上げる際は、より古く成立し精善なテキストであると野原氏が指摘する「宣城本」（『歌詩編四卷集外詩一卷』民國七年、武進董康誦芬室、用宋宣城本景印）を底本とする。
- (4) 『唐李長吉歌詩』和刻本漢詩集成唐詩五、汲古書院、一九七五年、四四七頁。
- (5) 『唐李長吉歌詩』和刻本漢詩集成唐詩五、汲古書院、一九七五年、四四七頁。
- (6) 『昌谷集』東京内閣文庫藏明刊本景照本、卷三第二六葉表。
- (7) 『三家評註李長吉歌詩』中華書局、一九五九年、二二〇頁。
- (8) 『李賀詩集』人民文學出版社、一九五九年、二二〇頁。
- (9) 荒井健『中國詩人選集一四・李賀』（岩波書店、一九五九年）には、この詩は採られていなかった。
- (10) 岩波書店、一九六一年、九二頁。
- (11) 集英社、一九六七年、二二七頁。原文和譯は句ごとに改行している。
- (12) 岩波書店、一九九三年、一四三頁。原文和譯は句ごとに改行している。
- (13) 平凡社、一九九九年、二二七頁。原文和譯は句ごとに改行している。
- (14) 「井泥四十韻」詩に詠じられた不條理（『李商隱研究』所收、汲古書院、二〇〇五年、二四七頁）。詹氏は李商隱以前の井戸を詠する詩について、「舊跡としての井戸」「詠物詩の素材としての井戸」「女性と關わる井戸」「教訓がこめられた井戸」、そして「政治的比喩としての井戸」があると指摘する。また、井戸のイメージは人の遇不遇が基底をなしており、井戸から水を汲み上げることから、爲政者が賢人を引き上げ用いるという連想が働き、そのイメージが、女が男性の愛情を受けることにも應用されていると述べる。注1拙稿において中國古代における井戸のイメージ、および、元稹『夢井』について分析したが、詹氏の論考に氣づかなかつた。今後の参考にしたい。ただし筆者は「後園鑿井」について「夫婦の情愛がずっと絶えないことを願った作」と考えており、詹氏と見解が異なる。
- (15) 舊注が指摘するように、「後園鑿井」は樂府の中の一語を題名に取るが、元になる樂府との間に内容の關連は見いだせない。このような李賀の詩は「後園鑿井」の他にも「難忘曲」がある。
- (16) 注1拙稿参照。
- (17) 「估客樂・其二」について、『玉臺新詠』卷一〇では作者名はなく、「近代西曲歌五首・估客樂」とする。また「有信數寄書」を「有客數寄書」に作る。
- (18) 李嶠「倡婦行」「消息如瓶井、沉浮似路塵」、李白「寄遠十二首・其八」「金瓶落井無消息、令人行數復坐思」等。以後李白的作品は『李白全集校注彙釋集評』

- (18) 『詹鏤主編、百花文藝出版社、一九九六年』に依った。『全唐詩』卷一八四は詩題を「寄遠十一首」とする。
- (19) 『王昌齡詩校注』(李國勝校注、文史哲出版社、一九七三年)に依った。『勸君酒、莫辭煩』について、『全唐詩』卷一四一に「一作勸酒莫辭煩」と注がある。また「心中片愧何可論」の「愧」に「作恨」との注が附されている。
- (20) 『白居易詩集校注』(謝思煒撰、中華書局、二〇〇六年)に依った。詩題は『全唐詩』等に依り改めた。
- (21) 以下顧況の作品は『顧況詩注』(王啓興・張虹注、上海古籍出版社、一九九四年)に依った。『全唐詩』卷一九では詩題を「短歌行」とする。
- (22) 顔師古注に「眉、井邊地、若人目上之有眉」。「繹微、井索也。夷、縣也。覺、井以輒爲覺者也。輒、擊也。言瓶忽縣礙不得下、而爲井覺所擊、則破碎也。」
「提、擲也。擲入黃泉之中也。」「鷗夷、草囊以盛酒、即今鷗夷(勝)也。」とある。
- (23) 『東方學報』六一、一九八九年。
- (24) 解注瓶(鎮墓瓶ともいう)に書かれた鎮墓文や道教經典を通し、後漢における「死者性(生者が死者に抱くイメージ)」を検討した論文として、池澤優「後漢時代の鎮墓文と道教の上奏文の文章構成——『中國道教考古』の検討を中心に」(『渡邊義浩編『兩漢儒教の新研究』所収、二〇〇八年、汲古書院)がある。
- (25) 引用した「井底引銀瓶」冒頭四句に關し、劉航・李貴兩氏は「白居易『井底引銀瓶』の民俗學問題」において、揚雄「酒箴」(論考では「酒賦」としているが誤りである)、王昌齡「行路難」、元稹「夢井」等を引用し、中國古代の民間禁忌や水崇拜、井戸崇拜、瓶崇拜、および、簪が自身を象徵する含意が「井底引銀瓶」冒頭四句に表現されていると指摘する(『文史知識』二〇〇一年第一期)。筆者が注1拙稿を執筆した際この論文は發表されていたが、當時氣づかなかつた爲引用しなかつた。ただし、注1拙稿で言及した先行研究(吳裕成『中國の井文化』天津人民出版社、二〇〇二年)同様、注1拙稿の主たる題材である元稹「夢井」の詳細な分析は行われていない。また劉航・李貴兩氏は、瓶そのものが崇拜對象であるとし、瓶が井戸に落ちるか否かで吉凶を占うことが表現される作品として、第一章で引用した吳正子が引く張籍「楚妃怨」等を引く。しかし筆者は瓶そのものを崇拜對象だつたとは考えておらず、劉航・李貴兩氏に賛同出来ない點も多い。
- (26) 『樂府詩集』卷七三では詩題を「焦仲卿妻」とする。また『玉臺新詠』卷一は「盤」を「盤」に作る。
- (27) 『李商隱詩歌集解』(劉學鍇・余恕誠著、中華書局、一九八八年)に依った。
- (28) 道源注「蟾善閉氣、古人用以飾鑲」、馮浩注「陳帆曰、高似孫緯略引此句、云是香器。其言鑲者、蓋有鼻鈕施之於帷幃之中也。」朱鶴齡注「按玉虎是井欄之飾、或以施汲器者。老杜銅瓶詩、蛟龍半缺落、猶得折黃金。舊注云、蛟龍刻鑄瓶上。玉虎亦此類耳。絲、井索也。」屈復注「海錄、玉虎、輓轆也。」
- (29) 『李商隱詩選』(岩波書店、二〇〇八年、一七二頁)。
- (30) 『李璟李煜詞』(詹安泰校注、人民文學出版社、一九五八年)に依った。作者を「李後主」とする版本や、「夢斷」を「何處」に作る版本もある。
- (31) 『花間集校』(趙崇祚輯、李一氓校、人民文學出版社、一九九八年)に依った。
- (32) 朱彝尊は本文に引用した注に續いて「入」通「迴」二字相應、言來之難也。」と述べているが、この點について筆者は賛成出来ない。
- (33) 注27『李商隱詩歌集解』の編者按語はこの二句を解して、「此聯意或蟾爐雖鎖、燒香時仍可開啓添入香料、井水雖深、借輓轆牽引亦可汲上清泉、既以之反襯幽居女子寂寥孤獨、内外隔絕之處境、亦以之暗示情之終不可久閉深藏、見此蟾爐添香、玉虎牽絲不免牽動情思也。」と述べている。第三句を「蟾の香爐は閉ざされてゐるが、香を焚く時には開く」と解する點は賛成出来ないが、二句の骨子を朱彝尊と同様に取り、「女性が自分の思いを奥深く隠しておけなくなったことが暗示され、女性の心が動かされずにはいられないことを表している」とする點は參考になった。
- (34) 井戸の輓轆を詠する唐詩は四十首程あり、「女性の悲哀と共に詠われる輓轆」(例えば常建「古興」)、「世俗を離れた環境(寺院等)」を描く際に詠われる輓轆

(例えば李頎「長壽寺綵公院新鑿井」)、「男性の才能を認め、引き上げ用いることを詠う際使われる轆轤」(例えば貫休「古意代友人投所知」)の三タイプに分けられる。このうち最も多いのは第一のタイプだが、轆轤の回轉が情事を暗示すると思われる作品は管見の限りなかった。李賀は「後園鑿井」の他に「美人梳頭歌」でも「轆轤」を用いており、轆轤の音によって美人が目を見ます様子を詠っている。この點は、本文で擧げた李璟「應天長」、牛嬌「菩薩蠻・其七」と同様であるが、この後一篇の大半は、美人の豊かな髪を描寫に費やされ、轆轤の回轉が男性の心變わりを暗示するか否かは定かでない。しかし、末尾で化粧の成った美人は、「背人不語向何處、下階自折櫻桃花」と描かれており、孤獨を自ら受け入れるかのような厳しく颯爽とした姿は、他に類がない。轉ずる轆轤がもたらす悲しみを克服した女性像として構想されているのかもしれない。「後園鑿井」と「美人梳頭歌」は、轆轤と女性が共に描かれる唐詩の中では、悲哀の色が明らかでないという點で殆ど唯一の例外である。

(35)『孟郊詩集校注』(華忱之・喻學才校注、人民文學出版社、一九九五年)に依った。「井中水」を「古井水」に作る本もある。

(36)孔穎達疏には「井者、物象之名也。古者穿地取水、以瓶引汲、謂之爲井。此卦明君子脩德養民、有常不變、終始无改、養物不窮、莫過乎井、故以修德之卦取譬名之井焉。」とある。

(37)『風俗通』(『太平御覽』卷一八九「井」)「風俗通云、井、法也。節也。言法制居人、令節其飲食無窮禍也。」『經典釋文』「井」「井、法也。」いずれも注1拙稿参照。

(38)詩歌ではないが、『隋書』「文學傳」および『北史』「文苑傳」に「徐陵、庾信分路揚鑣。其意淺而繁、其文匿而彩。」とあり、「淺」と「繁」が相反する意味で使われている。

(39)『張祜詩集校注』(尹占華校注、巴蜀書社、二〇〇七年)に依った。

(40)李白「送族弟凝之滌求婚崔氏」「與爾情不淺、忘筌已得魚」、李白「酬客勛見尋就元丹丘對酒相待以詩見招」「我情既不淺、君意方亦深」

(41)『世說新語箋疏』(修訂本)(余嘉錫撰、周祖謨・余淑宜・周士琦整理、上海古籍出版社、一九九三年)に依った。なお『三國志』「魏書・荀彧」所引「荀彧別傳」では、「彧不明而神傷」を「彧不哭而神傷」に作る。

(42)『先秦漢魏晉南北朝詩』「全唐詩」を資料とし、荀彧(奉倩)が詩中で詠まれた作品を調べたところ、劉綏(梁)「敬酬劉長史詠名士悅傾城詩」に「工傾荀奉倩、能迷石季倫」とあり美女の美しさは荀奉倩を惑わす程であると描かれる他、唐李翰「蒙求」でも「王述忿狷、荀彧感溺」と詠われている。

(43)詩題「梁臺古愁」は「梁臺古意」とする版本もある。第五句「鐘」、第六句「班」、最終句「湮」を、底本ではそれぞれ「鐘」、「班」、「簞」とするが、「宋蜀本」等に依り改めた。「梁臺古愁」同様、長い縄で太陽を繋ぎ時間の流れを止めたいと願う表現は、晉傅玄「九曲歌」「歲暮景邁羣光絕、安得長繩繫白日」、陳江總「歲暮還宅詩」「長繩豈繫日、濁酒傾一杯」等にも描かれている。